

中国貨幣の歴史

27 宋代の貨幣⑤—南宋の貨幣流通—



けんえんつうほう
建炎通宝・銅銭



しょうこうげんほう
紹興元宝・銅銭

せつじ
折二銭



かんじゆんげんほう
咸淳元宝・銅銭

南宋時代の銅銭の鑄造は、北宋時代に定着した折二銭が中心となり、12世紀末頃には銅銭鑄造額の8割（鑄造枚数では2/3）を超えたといわれる。

銭貨の背面にみられる流通上の工夫

(裏)



じゆんき げんほう
淳熙元宝・鉄銭
(当三銭)



か じょうじゅうほう
嘉定重宝・鉄銭
(当五銭)

(裏)



(柒 = 七)
じゆんき げんほう
淳熙元宝・銅銭



(元)
じゆんゆうげんほう
淳祐元宝・銅銭

南宋の鉄銭には、裏面に貨幣価値を示す記号（「^{よう}二星」＝三文の意）や数字（「五＝五文の意」）を刻んだものがある。これは、過去にみられた政府による恣意的な貨幣価値の変更がないことを示そうとしたものとされる。

南宋の銅銭には、私鑄銭防止の目的から、背面に鑄造年号を示す数字を刻んだものがあり、「番銭^{ばんせん}」として知られる。写真の「柒（七）」は「淳熙七年」、「元」は「淳祐元年」の鑄造であることを表している。

南宋の貨幣流通は、北宋時代の銅銭が国外へ大量に流出し、銅銭の鑄造量も激減して、銅銭の絶対量不足に直面する。南宋政府は、地域を限定した鉄銭化や、紙幣の発行を進めるが、戦時体制のもとで財政は紙幣の大幅発行に依存していく。

12 世紀、中国東北部で勢力を拡大していた女真族が「遼（契丹）」（907～1125 年）から自立し、「金」（1115～1234 年）を建国する。金は一時「宋」（北宋）と同盟し遼を滅ぼすが、1126 年、宋都・開封を攻略し、翌年九代欽宗（在位 1125～1127 年）ら多くの宋朝皇族・高官を連れ去る（靖康の変）。金から逃れた欽宗の弟高宗（在位 1127～1162 年）は、江南の「臨安」（浙江省杭州市）に都を置いて宋を復興し（南宋）、南宋と金が淮河の南北で対峙し国土を二分する。

こうした政治状況下、南宋の貨幣流通は北宋までとは大きく様変わりする。原料銅の産出の減少は著しく、北宋時代に百数十万貫（1 貫 = 1000 文）に及んだ銅銭の年間平均鑄造量は、南宋では 1 割程度の十数万貫レベルにまで激減する。この中で、南宋政府は、北宋時代に定着をみた折二銭（二文銭）を主体とする銅銭の鑄造を行い、12 世紀末頃には銅銭鑄造額の 8 割（鑄造枚数では 3 分の 2）強を折二銭が占めていた。折二銭中心の銅銭鑄造の背景には、北宋の滅亡を契機に金や朝鮮半島、日本など中国国外へ大量に流出した銅銭の多くが小平銭（一文銭）であったという事情がある。

南宋政府は、原料銅の制約や国外流出のため銅銭不足を解消することができず、これを補うため、地域を限定した鉄銭化を進め、また、財政面で紙幣に依存するようになる。

鉄銭についてみると、北宋時代に鉄銭専一化が進められた四川に加え、金と国境を接する江北地域の鉄銭化に向け、1168 年に鉄銭の鑄造施設を新たに設置する等の政策を推進していく。これは、鉄銭の投入により江北の銅銭を回収して江南で必要な銅銭を確保するとともに、金への銅銭流出防止を狙ったもので、江南から江北への銅銭の持ち出し、江北から江南への鉄銭の持ち出しを禁止する等の政策を行った。しかし鉄銭は、銅銭に比べ原料が安い大量に鑄造される一方、他地域への流出が禁止され、徴税での受取りが拒否されていたため、鉄銭が市中にあふれ価値が下落するという問題を招き、政府はその対応を迫られるようになるが、私鑄銭の激増といった混乱も生じる。

紙幣についてみると、南宋の紙幣は、高宗時代末の 1160 年、対金戦争に備えて発行された「東南会子」にはじまり、これが流通の中心となっていく。「東南会子」は、もとは臨安の金融業者が発行していた手形で、南宋政府が軍事支出用の銅銭不足を補填するために官営として財政支出に利用した。「東南会子」は江南・江北を通用地域とし臨安で銅銭と兌換されたが、二代孝宗（在位 1162～1189 年）の代には、戦争本格化に伴う増発から兌換が困難化した。不換紙幣化した当初は、会子の発行額・流通期限を定め、それまで銅銭で行っていた財政の支出、収入を銅銭・会子半々とする制度（「銭会中半制」）により発行額を抑制し、会子の信用保持に努めた。しかし、金、モンゴルと恒常的な戦闘状態になる 13 世紀以降、軍事費は膨張を続け、その支払いを会子に依存せざるを得ず、これらの制度は崩壊し、際限ない会子の大量発行を招く。なお、南宋時代には、「東南会子」以外にも通用地域を限定したいくつかの紙幣が発行されたが、いずれも現存は確認されていない。

銅銭の絶対量が不足する南宋において、鉄銭は私鑄銭の増大等の混乱のほか、重量が重く大口取引での支払いが不便という課題を抱えていた。一方、会子は、大量発行による価値下落という問題を孕みつつも、財政の支払いの中心的地位を保証されたため、銅銭に代わる主たる流通貨幣となり、元朝における紙幣専一政策を受入れる基盤となっていく。

[山岡直人、日本銀行金融研究所貨幣博物館]

[参考文献]

加藤繁、『支那経済史考証』下、東洋文庫、1953 年

高橋弘臣、『元朝貨幣政策成立過程の研究』、東洋書院、2000 年

宮澤知之、『中国銅銭の世界—一銭貨から経済史へ—』、思文閣出版、2007 年